

スピノヂスムの論理

竹 内 良 知

一

スピノザによれば、存在するものは、それ自身に於て存在するか、或は他のものに於て存在するかのいづれかでなければならぬ (Ethica: Pars I, axioma 1.)。すなはち存在するものはすべて、その存在の原因或は理由を持たねばならないからである。いま、それ自身に於て存在し、それ自身によつて理解される *conceptus* もの、言ひかへればその概念が形づくられるために他のものゝ概念を必要としないものを彼は實體と名づける (Eth. I, def. 3.)。實體はそれ自身に於て存在するものとして、それ自身の外に原因を持たない。それ自身がそれ自身の存在 *esse* の原因でなければならぬ。すなはち實體はそれ自身の原因 *causa sui* でなければならぬ。存在すると云ふ結果が同時に原因であり、原因がそのまゝ結果でなければならぬ。それ自身の原因とは本質が實存 *existentia* を含む、或はそのものゝ本性 *natura* について現實に存在しないと云ふことが考へられないものにのみ云はれることである (Eth. I, def. 1.)。従つて實體に於てはその本質がその實存の原因であり、實存が本質の結果である。或る存在について現實に存在しな

いと云ふことが、その本性に矛盾するときスピノザはその存在を必然的と云ふ (cf. *Tractatus de Intellectus Emen-*
*dati*one, §. 53. et *Eth.* I., *Prop.* 33. *Sch.* 1.)。それ自身の原因として實體は必然的な存在である。その本質は現實に
 存在しないことが出来ない。現實に存在する (或は、質存する) *existere* ことが原因としての本質の必然的結果に他
 ならないのである。實體はその本質そのもの、本性によつて現實に存在する。すなはち實體の本質には必然的に質存
 すると云ふことが屬してゐるのである (*Eth.* I., *Prop.* 7.)。實體は自らの本性そのもの、必然性によつて現實に存在
 するのである。言ひかへれば、本質そのもの、完全性によつて質存するのである。實體の質存はその本性の絶對的肯定
 に他ならない。かゝるものとして實體の存在を形づくるものは、その本質そのものを形づくるものである (cf. *Eth.* I.,
Prop. 20. *dem.*)。従つて實體の本質とその質存とは同じものである (*Eth.* I., *Prop.* 20.)。すなはち、實體にあつては
 本質とは現實に存在することであり、質存は本質そのもの、活動に他ならないのである。本質は質存する力であり
 (*Eth.* I., *Prop.* 34.)。質存は本質、即ち力が發動することである。スピノザの實體とはこの様に自らの本性によつて
 必然的に發動するインテンシヴな力そのものである。自らの本性の必然性によつて働く力として、實體は如何なる
 意味に於ても可能的存在、或は偶然的存在であることは出来ない。何故ならば、スピノザにとつて、可能、或は偶然
 と云ふことは存在とその原因、(即ち理由)との聯關が明らかでないものについてののみ云はれることだからである (cf.
Tract. d. *Int. Em.* §. 53. et *Eth.* I., *Prop.* 33. *Sch.* 1.)。實體は必然的に現實に存在するでなければならぬ。

いま、實體の本質は、その本性に於ける存在の絶對的肯定として無限であり (*Eth.* I., *Prop.* 8. et *Sch.*)、その存在
 の原因と結果との聯關が如何なる意味に於ても過程的と考へられないことに於て永遠でなければならぬ。すなはち
 實體の存在は永遠無限である。換言すれば無限にインテンシヴな力として必然的に現實に働くのでなければならぬ

い。そして、その現實の存在、即ち發動は永遠なるものとして何等時間にかゝはらない。永遠とは永遠なるもの、定義から起るかぎりの實存そのものであるからである (Eh. I, def. 6)°。しかも、實體はその本性以外の何ものによつても制約されてゐないものとして自由である。實體はその自由に於て必然的に實存する。實體の發動を性格づけるものは自由と云ふ性質 Propria に他ならぬ (Eh. I, def. 7. et Prop. 17. Cor. 2)°。また無限なる力としての實體が絕對に不可分であることは云ふまでもない (Eh. I, Prop. 13)°。

他に於て存在し、他によつて理解されるものをスピノザは様態と呼ぶ (Eh. I, def. 5)°。様態はその存在の原因(或は理由)を他のものに於て持つのである。従つて様態の本質は實存を含まぬ (Eh. I, Prop. 24)°。本質が、そのもの、本性として實存を含むならば、様態は、それ自身の原因でなければならぬからである。いま、實存することとが、そのもの、本性と矛盾するもの、存在は不可能でなければならぬ (cf. Tract. d. Int. Em. 2. 53. et Eh. I, Prop. 33. et Sch. 1)°。すなはち無でなければならぬ。然るに他に於て存在するものであるかぎり、様態は現實に存在してゐるのであつて、無であることは出来ない。しかも、その本質は自らの實存の原因であることは出来ない。従つて、様態が現實に存在する積極的な力は他のものによつて與へられたのでなければならぬ。いま、その現實の存在の能動因が實體でなければならぬことは云ふまでもない。何故ならば存在するものは、實體と様態の他には何も無いからである。

本性は現實に存在するもの、存在の必然性、即ち存在する力に他ならない。實存の他に本質があるとすれば様態の本質は、それ自身に於て存在するものでなければならぬ。様態の本質は實體から與へられたかぎりの實存の力

に他ならない。従つて、様態の質存が實體を能動因とするものであるならば、様態の本質もまた實體を能動因とする結果でなければならぬ (Eth. I, Prop. 25)。² この様なものとして實體は様態の存在の原因 *causa essendi* であり、様態は實體の働らきの結果に他ならぬ (Eth. I, Prop. 24. Sch.)。様態は實體なくしては存在することが出来ない。換言すれば、様態が存在するかぎり、實體は必然的に存在しなければならない。

いま實體の本質は永遠に現實にはたらく無限にインテンシヴな力に他ならない。實體が現實に存在すると云ふことは、無限の力がそれ自身の本性の必然性によつて永遠に現實に發動することである。従つて様態が實體を能動因とする³と云ふことは、無限なる力の發動した⁴こと、即ち無限なる力の働いてゐる状態であることに他ならない。様態が存在すると云ふことは實體が發動すると云ふことである。様態は實體の發動である (Eth. I, def. 5)。⁵ この意味に於て、様態は實體の本質を表出してゐる (*xprimere* と云はれるのである) (Eth. I, Prop. 25. Cor.)。

現實に存在する物 *res* はすべて實體の様態に過ぎない。何故ならば現實に存在してゐる物がそれ自身に於て存在するならば、それは必然的存在として永遠無限なる存在でなければならぬからである。しかも存在するものは、實體と様態との他にはあり得ない。従つて現實に存在してゐる物は實體の發動、即ち力の状態として、實體の本質を或る仕方⁶で表出してゐるに過ぎない。換言すれば、或る物が現實に存在するかぎり、その實在性に於て自らを表出する實體が必然的に現實に存在しなければならない。

實體は、それ自身の本性の必然性によつて働くものである。従つて、實體は様態の偶然なる原因ではない (Eth. I, Prop. 16. Cor. 1)。⁷ すなはち、現實に存在してゐる物は、それが質存するかぎり實體の必然性によつて必然的に存在してゐるのでなければならぬ。しかも實體の發動は實體そのもの、自由に他ならない。様態は、實體の自由によつ

て必然的に存在するのである (Eh. I, prop. 17, Cor. 2)。しかも實體は自らの結果を自らの内に含むものとして、すべての物の内在因である (Eh. I, Prop. 18)。現實に存在するすべての物は實體の内に存在する。

ところで現實に存在する物は、その存在が理解されなければならない。何故ならば、現實に存在すると云ふことはその存在の必然性が理解されるのでなければ云はれないからである。理解する *concipere* 或は概念 *conceptus* を形づくると云ふことは、スピノザに於ては、存在の必然性を肯定することに他ならない。従つて、結果の認識は原因の認識に依存するのである (Eh. I, axioma 4)。實體に於て存在してゐる様態は、實體との關係が明らかでないかぎり、その存在を十全に肯定することは出来ない。實體の概念なくしては様態の概念は形づくられることが出来ないのである。實體の本質は、それ自身によつてその必然性が理解される。従つて實體の本質は必然的に真理である。従つて實體の質存もまた永遠真理である (Eh. I, Prop. 20, Cor. 1)。現實に存在する物も、それが様態であるかぎり、實體との關係が明らかに肯定されるかぎり永遠真理である (Epist. X to De Vries)。

現實に存在する物の概念が形づくられるかぎり、それは「何もの」かの概念でなければならぬ。理解されるためには知覺されて *percipere* ゐなければならぬ。様態が「何」として、換言すれば、或る實在として知覺されてゐるかぎり、その能動因として、その様態に於て自らを表面してゐる實體の本質も、その知覺された様態の實在性に於て知覺されなければならぬ。現實に存在する物が知覺されるかぎり、その能動因としての實體も知覺されるのでなければならぬ。様態の概念が形づくられるかぎり、實體は知覺されてゐなければならぬ。すなはち、實體が質存しないならば、知識もあり得ないと同時に、それについて知識を持つことが出来ない實體もあり得ないのである。

さて、實體の本質を形づくつてゐるものとして知性が實體について知覺するものをスピノザは屬性と名づける (Eh.

I, def. 4.)。すなはち、屬性は知覺されてゐるかぎりの實體の本質に他ならない。言ひかへるならば、知覺される状態に於て、自らを表出してゐるかぎりの實體の本質に過ぎない。すなはち知性に於て知覺された状態との關係に於ける實體の本質である。しかし、屬性は状態との關係に於ける實體の本質として、まさしく、實體そのものに屬するものでなければならぬ (Eth. I, Prop. 19. dem.)。従つて、屬性はそれ自身に於て考へられなければならない (Eth. I, Prop. 10.)。それ自身によつて概念が形づくられるもの、即ち、それ自身によつて理解されなければならない (Eth. I, Prop. 9.)。そして、それは知覺されたかぎりの實體として、それ自身の類に於て *in suo genere* 永遠無限であるに過ぎぬ (Eth. I, def. 6. expl.)。現實に存在する物が知られるかぎり、實體は常に屬性として考へられなければならない。知性はそれ自身に於て存在するのではなく對象の對象的存在 *esse obiectivum* として、存在の必然性の肯定に過ぎない。それ自身、所産的なるものであり、状態である (Eth. I, Props. 30. 31.)。知性が實體そのものであるならば、状態が屬性の下に於て考へられると云ふことはあり得ない。すなはち、知覺されると云ふことは成立しないであらう。何故ならば、知覺すると云ふことは知性が受動に置かれることに他ならないからである。實體は知性によつて動くのではなく、それ自身の本性の必然性によつて動くのである。従つて實體そのものは如何なるものとしても知覺されることは出来ない。言ひかへるならば、如何なる屬性としても限定されることは出来ない。何故ならば知覺されるものとしての屬性は、それ自身は、それ自身の類に於ける永遠無限なる實體の本質として限定されないのであるけれども、知覺される物としての状態に於て自らを表出してゐるかぎりの實體の本質に過ぎないからである。

それ自身如何なるものとしても限定されない實體は絶対に無限なる力として、無限なる實在性をもつと云はなければ

ばならない。物が多くの實在性を持つてば持つほど、それだけ多くの屬性がその物に屬するのでなければならぬ (Eh. I, Prop. 9)。絶対に無限なるものとして、實體そのものは、無限に多くの屬性に於て考へられることが出来るのである。しかし屬性はそれ自身で考へられるものでなければならぬ。従つて、各々の屬性の間には如何なる關係もあり得ない。各々の屬性は相互に何等かの限定の關係を持つことは出来ないのである。しかも實體は、その本性そのものによつて必然的に實存するものとして、必然的に現實でなければならぬ。すなはち、如何なる意味に於ても可能的と云ふことは許されない。實體そのものが無限に多くの屬性に於て考へられるかぎり、實體そのものは無限に多くの屬性からなると考へられるのでなければならぬ。實體そのものは、その本質そのもの、必然性によつて、必然的に發動するものとして無限にインテンシヴな力に他ならない。すなはち實體は絶対は分割され得ないのである。屬性はそれ自身存在すると考へなければならぬけれども、それは様態が知覺せられるかぎりであつて、同時に無限に多くの屬性が平行して存在するのではない。無限に多くの個物が相集つて實體を構成してゐるのではない。實體の如何なる屬性も、それによつて實體そのものが區分されるならば眞に考へられないのである (Eh. I, Prop. 12)。實體が無限に多くの屬性からなると云ふことは實體そのものについては、その無限の實體性を言ひ表はす如何なる普遍的概念をも持つことが出来ないからに過ぎない。知覺された様態の實在性ととの關係に於て、實體が或る時はこの屬性に於て或る時は他の屬性に於て實體そのものが考へられるに過ぎないのである。

實體そのものは様態が知覺されるかぎり様態との關係に於て無限に多くの屬性からなると云はればならぬ。スピノザは「各々が永遠無限なる本質を表示してゐる *spiritus* 無限に多くの屬性からなる絶対無限の實體」を神と呼ぶ (Eh. I, def. 6)。すなはち神は實體そのものと考へられ知覺されたかぎりの實體ではなく、絶対なるかぎり

の實體そのものに他ならない。しかしして、かくの如き實體は必然的に實存するのである(Eth. I, Prop. 11.)。カントの批評にもかゝらず神はその定義そのものによつて實存するのである。何故ならば、あらゆる物は、その様態として、神なくしては存在することも理解されることも出来ない。何ものかゝ現實に存在するかぎり神は必然的に現實に存在してゐなければならぬ。神はあらゆるものゝ能動因即ち存在の原因であるからである。人間の精神も様態に過ぎない。神の存在について何ごとかを考へるかぎり、神は實存してゐるのであり、その實存を眞に否定するならば、否定する精神そのものゝ存在が否定されるのでなければならぬからである。神の存在の存在論的證明を否定することは却つて何等かの意味で人間の精神の有限性を否定することに他ならない。人間の精神を帝國の中なる帝國として見ることに他ならない。われわれは神の存在の存在論的證明に於て却つて徹底した理性の自己批判を見ることさへ出来るのである。

神を絶対無限の實體として神の他には如何なる實體もあり得ないし、又考へられることも出来ない(Eth. I, Prop. 14.)。しかも神が實存するならば、必然的に様態が存在する。様態の存在とは神がその本性の必然性によつて發動することに他ならないからである。様態の存在は神の實存である。自然に於ては、知性の他には、實體(神)とその様態以外の何ものもあり得ない(Eth. I, Prop. 15. dem.)。然し、知性は實體と様態との外にあるものではあり得ない。

いま、神はそれ自身に於て存在するものとして、換言すれば、存在するすべてのものゝ能動因として、能産的自然であること云ふことが出来る。様態は神の活動の結果、即ち神の發動に於て生起したものであるとして、所産的自然と云はれることが出来る(Eth. I, Prop. 29. Sch.)。現實に存在する物は神の意志によつて創造されたのではなく、實體の發動

に於て生起したるもの、即ち様態に過ぎなき (cf. Ep. 4. to Oldenburg, et Eh. I, Propps. 30-33 et Sch.)。現實に存在する物はそれが様態である限り、その存在を抽象的に謂はざる量として、時間と空間に於て考へられる存在と解することとは出来なき (Eh. II, Prop. 45. Sch.)。實體と様態との關係は、現實の存在が、存在する力と考へられるかぎりの理由と歸結との關係、即ち存在の必然性の關係に他ならない。換言すれば、能産と所産、或は實存の原因と結果として自然即ち現實そのもの、現實性の理由にかゝるものである。

現實に存在すると知覺される物はすべて様態として存在するかぎり知性に於て理解されなければならない。理解されるかぎりの様態との關係に於て實體は屬性として考へられなければならない。現實に存在する物は或る屬性の下に於ける様態として考へられなければならない。すなはち、知性が働らくかぎりに於て、神と個物との關係は、屬性とその下に於ける様態との間の關係として考へられなければならない。然し、知性は實體の外に超越するものではなく或は實體そのものではなく、實體の内にて於て現實に存在してゐる對象的存在 *esse objectivum* として所産的自然に過ぎないことは繰り返すまでもない。知性は、存在する物の存在の必然性の肯定であつて、存在に先だつものとして存在の原因と考へられることは出来ない。實體の能産性を性格づけるものは、知性によつて對象化された必然性ではなく、絶對の自由¹⁾に他ならない。それに對し、様態の所産性を性格づけるものは自由なる必然性を負はされたものとしての必然性、即ち決定に他ならない。

II

神は必然的に實存する。しかも、それ自身の原因として、原因は同時に結果である。神は必然的に發動する。すな

はち神が質存することは様態が必然的に存在することに他ならない。知性によつて理解される様態が存在するかぎりそれは或る屬性の下に於ける様態として考へられなければならない、屬性は知覚されるかぎりの實體の本質として、實體の本質である。すなはち、永遠無限に存在するものとして考へられなければならない。屬性は、或るものとして知覚されるかぎりの無限の力として、それ自身によつて必然的に發動すると考へられる。いま、屬性として神が發動するかぎり、その發動は永遠無限である。その發動として、永遠無限なる様態が、屬性そのものによつて永遠無限に質存する (Eh. I, Pr. p. 21)。すなはち神の發動、すなはち神の質存は、所産の自然そのものとして永遠無限なる様態に他ならない。神の質存は、現實の現實性の理由として、永遠無限なる様態も屬性そのものによつてのみ永遠無限に存在するのである。しかし、神そのものは、絶対に無限なる存在として、如何なる意味に於ても様態ではあり得ない。神そのもの、質存が、直接無限様態として考へられるかぎり、それは、現實に存在すると知覚された物と相關的に實體が考へられたことに他ならない。

いま個物と云はれるものは、有限にして一定の質存を有する存在、即ち或る屬性を一定の仕方にて表出してゐる様態である (Eh. I, Prop. 25. Cor.)。言ひかへれば一定の仕方にて神が發動してゐることである。それは有限であるかぎり、神の本質(屬性)そのもの、發動であることは出来ない。屬性そのもの、發動は直接無限様態であり、直接無限様態は永遠無限でなければならない。すなはち個物は無限なるかぎりの神の發動ではない。

有限と云ふことは或る本性の質存が部分的に否定を含んでゐると云ふことである (Eh. I, Prop. 8. Sch.)。全面的な否定は質存しないと云ふこと、即ち無であると云ふことに他ならない。有限なる物は有限なるものとして現實に存

在してゐるのでなければならぬ。従つて、有限なるものとしての個物が現實に存在すると云ふことは、それが表出してゐるかぎりの屬性、即ち神の力が部分的に否定を含んでゐることに他ならない。何故ならば、個物の本質は實存を含まない。個物は神の様態に過ぎないからである。

然し屬性は不可分なる永遠無限である。その發動としての様態は永遠無限に實存する様態でなければならぬ。いま、個物としての様態が有限であると云ふことは、存在する力が有限であることである。その限り、存在する力は何かによつて制約されてゐるのでなければならぬ。然し神以外に實體はなく、屬性はそれ自身によつて考へられなければならぬ。従つて他の屬性によつて制約されることは出来ない。しかも、様態の存在する力は、それ自身の本質が實存を含まないかぎり、神の力に他ならない。従つて存在する力が有限であると云ふことは、神の内に他の有限なる様態が現實に存在してゐると云ふことでなければならぬ。個物は屬性そのものゝ直接的な發動ではなく、近接因として他の様態によつて制約されてゐるかぎりの屬性の發動に過ぎない。個物としての様態は、同様に有限にして一定の實存をもつ他の原因によつて實存し、活動するやうに決定されて實存し活動することが出来る。第二のものは第三の原因としての有限様態によつて、實存するやうに決定されて、はじめて實存するのでなければならぬ。このやうに一定の秩序に於ける無限なる近接因の聯關によつて決定されてはじめて個物は個物として實存することが出来るのである (Eih. I, Prop. 28.)

現實に個物が存在するかぎり、言ひかへれば有限なる様態が屬性を表出してゐるかぎり、神はその屬性として本性の必然によつて發動してゐる。いま現實に個物が存在してゐるかぎり、無限なる本性の必然によつて神は無限に多くの仕方で發動しなければならぬ。すなはち、無限に多くの個物が現實に存在しなければならぬ (Eih. I, Prop.

16)。いま屬性が、その絶對の本性から發動するかぎり、それは直接無限様態として發動する。しかし、個物が現實に存在するかぎり、直接無限様態は、無限に多くの仕方でも發動したかぎりの屬性の發動でなければならぬ。そのかぎり、無限に多くの仕方にかける屬性の發動は、屬性が永遠無限に存在する變狀(直接無限様態)によつて變様されたかぎり屬性から起つたものとして、永遠無限に必然的に存在しなければならぬ (Eth. I, Prop. 22)。有限様態は、無限に多くの仕方でも發動した屬性(即ち永遠無限様態)の一つの部分に過ぎないのである。

いま、屬性はその本性の必然性によつて發動する。従つて、無限に多くの仕方での發動も必然的でなければならぬ。従つて無限に多くの個物は、必然的な關係に於て存在してゐなければならぬ。いま個物が現實に存在するかぎり、それはこの無限なる關係の一定の秩序に於て決定されてゐるのでなければならぬ。いま、この無限に多くの個物の間の關係は、永遠なる關係でなければならぬ。何故ならば、それは無限なる神の本性の必然性に他ならないからである。すなはち、この關係は自然の共通秩序に他ならないのである。個物は現實に存在するかぎり、この永遠なる自然の共通秩序に於て、はじめに現實に存在することが出来るのである。言ひかへるならば、個物は無限に多くの個物と關係することに於てはじめて個物であることが出来る。すなはち、個物は無限の必然性を謂はゞ外に負ふものである。單獨なる個物とは、この無限なる關係からの抽象に過ぎない。個物が質存すると云ふこと、即ち有限様態が成立すると云ふことは、無限に多くの他の個物との一定の關係に於て、活動すると云ふことに他ならない。すなはち、個物は他との關係に於て、一定の仕方でも、神の本質を表出してゐることである。しかもこの他との關係の一定であることは、神の本性の必然性に他ならない。従つて、個物は、神によつて決定されたものでなければならぬ。或る仕方でも働くやうに決定されたものは、すべて神によつてその様な仕方にか決定されたのであり、決定された以外の仕方でも

くことは出来ない(Erh. I, Prop. 26.)。従つて、自分を決定されないやうにすることも出来ない(Erh. I, Prop. 27.)。しかも一定の秩序に於て決定されたのであり、それ以外の秩序に於て決定されることは出来なかつたのである。言ひかへるならば、物はそれが現にある以外の仕方、或は別の秩序に於て、その物であることは出来なかつたのである(Erh. I, Prop. 33.)。

然し、個物は神に於て豫定せられたものではない。何故ならば、神はそれ自身の無限なる本性の必然によつて發動するのであり、神が先づ個物を認識したために發動するのではない。個物が決定されてゐると云ふことは、一つの物は無限のものに對する關係に於てはじめて決定されると云ふことに他ならない。個物は他の無限に多くの個物と相關するのである。然し、その秩序は、相關的に變ることを通じて無限なる必然性として一定であり永遠である。神が永遠無限であるかぎり、個物は屬性から演繹することは出来ない。それ自身無限なる屬性から個物を演繹することは不可能である(cf. Ep84. to Tschirnhaus.)。

個物が現實に存在すると云ふことは、決定されると云ふことである。しかし、個物が決定されると云ふことは、個別の本質が否定されることではない。個物の本質は、その實存の能動因ではないからである。個物が有限であると云ふことは、他の個物によつて決定された仕方で神が發動することに過ぎない。個物の本質は「それがなければ、その物が無い」と云はれるものではない。「それがなければその物が無い」と云はれるものは能動因としての實體、即ち神に他ならない。個物の本質は様態としての神の發動に過ぎない。神の本質を個物の本質に於て僭することは絶対に許されない。個物の本質を「それなければその物が無い」と云はれるものとなすことは、*ens imaginativus* 或は *ens rationis* として、「現實の存在とか、はりのない一般名辭に過ぎない普遍を個物の本質と混同

し、それによつて現實の存在を概念のフィクションと置き換へることに過ぎない。スピノザは徹底したノミナリストである。現實に存在するのは個別的なものでなければならぬ。現實に存在する個物の本質は「それが興へられるならばそのもの、現實存在が興へられそれが除去されるならば、そのもの、現實存在が除去されるものである。すなはち、それがなければ物が、物がなければそれが、それがなければ物が、存在することも理解されることも出来ないもの」に他ならぬ (Eih. II, Prop. 10. Sch.)。個物の本質はどこまでも有限なものであり、個別的でなければならぬ。個物の本質は、他の個物との一定の關係に於て、その個物が表出してゐる神の本質である。すなはち一定の仕方で發動する力、一定の仕方で發動するかぎりの神 *Deus quatenus* に他ならぬ。言ひかへるならば、一定の様式に於て働くかぎりの力である。有限なる仕方では表出されてゐるかぎりの、神の本質として有限でなければならぬのである。しかし、決定されることは、無限に多くの仕方では神が發動することである。したがつて、決定されることと決定することとは別の力ではない。そのかぎり個物の本質は、何等の否定をも含まないのである。決定されたかぎりの力が個物の本質だからである。決定されると云ふことは、決定された存在に固執することである。自らの存在に固執する努力 *conatus* によつて、個物の現實的本質なのである (Eih. III, Prop. 7.)。

一定の様式で働いてゐる力が個物の本質である。然し、一定の仕方とは個物が個物であることであり、それは他の個物との一定の秩序に於ける關係を離れて云ふことは出来ない。個物の本性とは決定された仕方では働くことである。力が働くことと云ふことは何等かの結果が生ずると云ふことである。従つて興へられた本性から何等かの結果を生じないものはない (Eih. I, Prop. 36.)。すなはち個物の本質は決定されたことに於て、即ち力を傳達されることに於て力を傳達することである。決定されることに於て、決定する一定の様式に於て働く力が個物である。従つて自己に固執す

ることは他から決定されることに於て、他を決定することに他ならない。しかもその力は能動因によつて與へられたものに過ぎない。個物が現實に存在すると云ふことは、神が無限に多くの仕方で發動することである。個物は、無限に多くの様態、換言すれば永遠無限様態に於てはじめて個物として決定されるのである。しかも決定されることは、決定する力の發動に他ならない。個物が質存すること、神が永遠無限様態として發動することを別に考へることは出来ない。そのかぎり、個物は神の發動として永遠である。しかも神の能産性を性格づけるものは自由である。個物の存在は、無限なる必然性を負ふものとして、無限に多くの個物と必然的關係にあることに於て自由である。しかも、必然的關係に於て存在するものとして、あくまでも有限であり、その有限性そのものに於て完全である (cf. *Eh. Pars. V.*)。

個物は有限なるかぎり、無限なるものに於て考へられなければならない。有限なるものは無限なるものゝ外に在ることは出来ない。神は、個物の内在因である。しかし、このことは有限なるものの構造であつて、無世界論を意味するものではない。現實そのものゝ現實性の構造である。現實と云ふことは二様の仕方であられる (*Eh. V., Prop. 29. Sch.*)。スピノザに於て現實と云ふことは、存在するものゝ存在性、即ち存在の必然性であつて、物を一定の時間と場所に關係せしめて、その存在を考へるかぎりの現實ではない。想像と知性とは區別して考へられねばならない。スピノザを無世界論とするものは何等かの意味で人間の精神を「帝國の中なる帝國」とするものである。

三

スピノザの論理は、個物が現實に存在するかぎりの存在の現實性の構造に他ならない。個物が現實に存在すると云

ふとき、それは先づ、デカルトがそのコギトに於てさぐり當てたとき、自己の存在の事實である。人間が思惟するものであるかぎり、人間が存在してゐることは如何なる懷疑を以てしても疑ひ得ない事實である。存在すると云ふことは積極的な力である。しかし、人間は有限なる存在に過ぎない、換言すれば、生まれたものに過ぎない。そのかぎり、それ自身に於て存在すると考へることは出来ない(cf. Eth. II, Prop. 10)。そのかぎり、人間はそれ自身に於て存在すると考へられることは出来ない。それ自身に於て存在するものに於てのみ存在する。すなはち、人間の存在は神の本質を或る仕方であらわしてゐる状態に過ぎない。しかし、この状態は思惟する状態である。思惟の状態としての觀念は何ものかの觀念として、對象の形相的存在 *esse formalis* の必然性の肯定である。自己の存在を肯定することである。すなはち、觀念(=觀念としての存在)は、存在の對象的存在 *esse objectivum* に他ならない。いま人間が思惟すると云ふことは自己の存在を肯定してゐることである。人間の思惟は自己の存在の對象的存在である。思惟する人間の存在、即ち自己の存在の觀念は、神の本質が思惟と云ふ實在性に於て知覚せられてゐるかぎりの神の状態に過ぎない。人間は思惟するかぎり、思惟の屬性の下で考へられる状態である。思惟の對象として自己の存在は身體、即ち擴がりとして知覚されてゐる。そのかぎり存在は擴がりと云ふ實在性に於て、自らの本質をあらわしてゐるかぎりの神の状態に他ならない。すなはち、身體は延長 *extensio* の屬性の下で考へられる状態である(Eth. II, Prop. 7)。人間の存在は思惟の屬性と延長の屬性に於て考へられるのみで他の如何なる屬性も知覚されない。そのかぎり人間は自ら感ずるまゝに存在してゐるのである(Eth. II, Prop. 13, Cor.)。感ずるまゝにある自己は或るときには思惟の屬性の状態として、或るときは延長の屬性の状態として考へられる。感ずるまゝの自己はかゝるものとしての神の状態である。

いま、自己は思惟の屬性の状態であるかぎり觀念であり、延長の屬性の状態であるかぎり身體(或は物體=個物)で

ある。觀念は存在の必然性の肯定、すなはち對象の客觀的存在としての力である。すなはち存在の必然性を肯定（或は否定）する力である。謂はゞ一定の仕方で判断することゝ於て形づくられる概念 *conceptus* 或は概念を形づくることゝしての力である。勿論、こゝに概念が表象でないことは云ふまでもない。身體は一定の仕方で働く力、換言すれば一定の仕方で運動（或は静止）する力である。

一つの物體が現實に存在するならば、延長の屬性そのものゝ無限なる必然性によつて無限に多くの物體が、自然の共通秩序に於て現實に存在しなければならない。（自然の共通秩序は永遠なる秩序であつて時間にかゝはらない。従つてそれは同時と云ふことをも意味しない。）自然の共通秩序に於て存在すると云ふことは、有限なる個物は、一定の秩序に於て近接因の聯結が成立することである。いま觀念は對象、即ちその觀念の形相的存在の必然性の肯定として精神の概念 *Conceptus* である（*Eth. II. de I. 3. expl.*）。従つて、現實に存在するものの觀念は、他の現實に存在するものゝ觀念によつて決定されてはじめてその物の觀念である。この様にして、現實に存在するものゝ近接因の聯結秩序に於て、はじめて現實に存在するものの觀念である。すなはち、物の聯結秩序と觀念の聯結秩序とは同じものである（*Eth. II. Prop. 7.*）。觀念は對象たる物の存在の必然性の肯定、即ちその存在の必然性を示す概念である。しかしそれは、表象されたものと、表象との平行、或は又、所謂身心の平行を意味しない。存在するものが實體の様態でありそれが知覺されてゐるかぎり、その實在性が或るときは或る屬性に於て、或るときは他の屬性に於て考へられたに過ぎないからである。神の思ふ力は現實に働く力に等しいのである（*Eth. II. Prop. 7. Sch.*）。屬性を平行と考へることは、神が屬性によつて分割さるゝことを豫想するものであり、屬性の意味を否定することである。身心の區別とは、人間の有限性の故に知覺されるものに過ぎない。

いま、一つの物體が存在するかぎり、延長の屬性そのものが發動しなければならない。すなはち、神の力は延長として、運動静止の力として知覺される。しかも個物が現實に存在するかぎり、この屬性としての力の發動は、無限に多くの個物の存在、即ち無限なる運動傳達の形式、換言すれば永遠なる均衡或は比例に於ける運動静止である。スピノザが宇宙の全貌 *Totius facies universi* と呼ぶものがこれである。身體は無限なる運動傳達に於ける一定の状態或は一定の様式に於ける運動の傳達としての神(延長)の發動である。觀念は現實に存在するもの、觀念であり、個物の觀念があるかぎり、それは忠惟の屬性そのものが發動することに於て考へられる神の觀念に於てあるのでなければならぬ(*Eh. II, Prop. 4*)。身體が無限なる宇宙の全貌、即ち無限なる運動傳達の有限なる様式であるかぎり、人間の精神は無限なる知性としての神の觀念の有限なる部分として、有限なる知性である。知性とは觀念の一般名辭に過ぎない。

いま方は推理と計算とによつて無限に分割することが出来る(*Ep. 6 to Oldenburg*)。無限分割に於て、單純に運動或は静止としてのみ考へられる物體、即ち單純體 *corps simplicissimum* が考へられる(*Eh. II, Lems.*)。云ふまでもなく單純體は *ens rationis* である。單純體の複合として考へられる複雑な力はそれが同一の結果に對して共働する或は同一の結果を生ずるかぎり、その力の働きに於て統一を持つ個物に他ならない。身體はかゝる複合體と考へられるかぎりの個物である(*cf Eh. II, def. 7. cf Lems. et post.*)。身體はそれが一定の様式での運動傳達と考へられるかぎり個物として現實に存在するのである。しかし、それは宇宙の全貌に於ける無限に多くの他の物體(或は身體)と

の間の運動の傳達に於てのみ身體である。他の身體との運動の傳達なくしては身體は存在しない。

人間の精神はこの様な身體の觀念に過ぎない。すなはち、一定の様式での運動の必然性の肯定である。しかし、精神を形づくる觀念は、自己、即ち身體と外部の物體とが、運動を傳達する様式の觀念に過ぎない。したがつてその觀念は自己と他の物體との兩者の本性を含んでゐる。しかも、身體と他の物體との運動の傳達は、無限なる運動傳達に於てのみ決定されるのである。従つて、有限なる身體としての人間の精神を形づくる觀念は、有限なる觀念であつて身體の決定、即ちその存在の必然性を十全に肯定することは出来ない。身體と他の物體の本性を含んだかぎりでしかその必然を肯定することは出来ない。

この様な觀念をスピノザは想像 *imaginatio* と呼ぶ。人間が想像するかぎりに於て持つすべての概念は想像である。自然の共通秩序の内にあるものとして、想像は自然そのもの、構造の必然性を肯定するものでなく、他の物體と自己との現存を肯定するに過ぎない。かゝる觀念は、他のものゝ觀念によつて限定されたかぎりの神の觀念、言ひ換へれば、思惟の屬性が無限に多くの仕方で發動したものである。この觀念の體系からの抽象に過ぎない。即ち、他のものの觀念によつて否定されたかぎりの思惟の屬性の發動として否定。非存在を含んだ觀念である。そのかぎり、身體或は物體は、延長の力の否定として擴がつたもの *extensa* と觀察される。すなはち、すべての物體は、單に偶然に現存するものとして觀察される。永遠なる運動の傳達は變化として、その秩序は永遠の否定として時間と考へられる。物體の存在、即ち必然的な運動の傳達は、すべて偶然或は變化としてのみ肯定され否定されるのである。

個體の現實の本質はその存在に固執する努力である。身體として見られるかぎり、それは欲求と呼ばれ、精神のみについては意欲 *voluntas* と云はれる。個體として人間が身體と精神にかゝるかぎり、それは欲望と呼ばれる。あ

らゆる事態は價值的は判断されるのである。いまこの本質が想像力に於て肯定されるかぎり運動の傳達は力の増減として見られる。この様な觀念をスピノザは情念 *affects* と呼ぶ。情念は他によつて制約された力としての觀念であり、身體の運動の傳達を十全に肯定してゐるのではない。そのかぎり、情念に於ける運動は受動 *Passio* である。そのかぎり人間の欲望、即ち意志は強制されてゐるものである。

人間が自然の共通秩序に於て存在するかぎり人間の精神が想像であることは必然的であり、想像力の他に別に知性があることは出来ない。知性は身體の對象的存在として肯定し否定する、即ち判断する力に過ぎないからである。想像はそれが非存在を含むかぎり不十全であり、混亂してゐる。然し、一定の仕方での判断の力として、その積極性を否定されることは出来ない。

あらゆるものに共通して部分に於ても全體に於ても等しいものゝ觀念は必然的に十全である。十全なる觀念とは對象とは別に眞なる觀念の徴標を自らに含む觀念である (Eh. II, Jct. 4)。しかし、眞理性はその十全性の他にその保證を持たない。精神の内には觀念が觀念であるかぎりに於て含む意欲、即ち肯定・否定があるのみである (Eh. II, Prop. 49.)。

いま、想像以外に人間の精神を形づくる觀念はあり得ない。自己は感ずるまゝにしかあり得ないからである。人間の現實的本質は想像力が判断する身體の力、即ち欲望に過ぎない。しかも、それは必然的に不十全である。しかし、觀念は想像としても、その積極性に於ては永遠なる形式に於て存在の必然性を肯定する力である。觀念は必然性の肯定として屬性の形式的本質を含んでゐるのである。それ故、多くのものを同時に想像し、自己の身體を離れて、多くの想像を一致、差別、反對に於て批判し、その内に必然性を見出し、その十全な必然性に於て共通概念 *notiones communes*

を形づくることが出来る。この様な仕方では存在の必然性を理解する様式をスピノザは理性 *rationis* と云ふ (Eh. II, Prop. 40. Sch. 2.)。然し、そのかぎり、理性は共通なるもののみか、はるのであつて自己の身體の力、或は現實に存在する物の個別の本質にはかゝはらない。然し、屬性の形式的本質、即ち必然性の永遠なる形式に於て自己の身體の必然性を肯定することは出来る。すなはち、自己の想像或は情念の含むかぎりの必然性を神の必然性に於て理解することである。理性によつて自己の情念を批判するのである。かくすることによつて自己の身體の有限性が神の必然性に於て理解されるならば、自己の存在、即ち身體は、欲望に於ける運動に於て永遠であることが理解される。身體の運動は、その十全性に於て肯定される故に、欲望は結果の十全なる原因として能動 *actio* である。この様な仕方にて自己の身體を肯定する様式をスピノザは直觀知 *intuitiva scientia* と呼ぶ (Eh. II, Prop. 40. Sch. 2.)。

眞觀知は自己の存在の必然性をその能動因としての神との關係に於て十全に肯定する知性の活動の様式である。しかし、それは他の物體との關係の必然性に於てのみなされるのである。直觀知は、身體の觀念の肯定の仕方にて理性或は想像と異なるのみである。身體が有限であるかぎり、その觀念も必然的に有限である。直觀知は情念を理性の永遠なる形式に従つて批判し、その有限性をその必然性に於て肯定する知性の活動に過ぎない。想像が含む積極的なもの以外に人間の知性の力があり得ないのである。

直觀知としての様式に於て、情念が批判され、その有限性の必然性が神の必然性に於て理解されるかぎり、自己の存在はその有限性に於て永遠であり、自由なる神の最高の完全性を負ふことが理解されるのである。そのことに於て身體の存在即ち運動は、神の永遠無限なる力のその身體としての様式に於ける發動であることが理解される。すなはち直觀知に於て、身體を肯定するかぎり、身體、即ち自己の存在、従つて自己の思惟そのものが、神の永遠なる状態で

あることが自覺される。自己の存在はその存在に於て神の必然的存在を證すのである。しかも直観知は、有限なる身體の觀念の活動の様式に過ぎないものであるかぎり、どこまでも有限である。有限なるものゝ構造を無限なるものゝ必然性に於て理解する様式として、直観知は知性の活動に批判の様式に過ぎない。そこには如何なる意味での神祕主義も含まれてはゐないのである。

四

スピノヂスムの論理が分析的であることは否定出来ない。有限なる存在は、それ自身に於て存在することは出来ない。そのかぎりそれは、それ自身に於て存在するものに於て理解されなければならないからである。現實に存在するものは、その原因から、その存在の必然性を理解されなければならない。従つてスピノヂに於て哲學の秩序は、それ自身に於て存在し、それ自身によつて理解されるもの、すなはちそれ自身必然なるものゝ定義から出發しなければならない。そのかぎりに於て、それは明らかに幾何學的(或は數學的)である。多くの人々の批難はこの所謂幾何學的方法或は定義的方法に集中されたのであつた。そこに演繹的方法を讀みとつたのである。しかし個物が屬性から演繹されないことはスピノヂ自身に明白にチルンハウスに答へたところである(Ep. 3)。しかも定義とは現實に存在する物の必然性、或は本質の肯定である。個物の本質の必然性は、無限なるものに於て決定されなければならない。すなはち、無限に多くのものとの必然的關係に於て相關的に決定されることである。そこに如何なる意味に於ても演繹的方法はあり得ない。無限なるものに於て有限なるものゝ構造が把握されるものとして、幾何學的方法とは謂ひ得べくんば解析的方法を意味するものである。スピノヂにとつて論理は概念の論理的操作によつて現實をモデルにした理

解を組立てることではなく、現實そのもの、現實性の構造をその理由との關係に於て自覺するにすることに他ならぬのである。

多くの批評や解釋は、その主張にもかゝはらずスピノヂスムの致命的缺陷を指摘したことはなかつたのではあるまいか。何故ならば人々は、何等かの意味で知性と想像とを混同し、人間の精神を「帝國の中なる帝國」とする前提の上に立ち、人間の精神の有限性の徹底的な批判の上に立つたことはなかつたからである。スピノヂスムはその豊富なる生命を以て、今日の現實に於ても強靱に生存し得るものであらう。

(完)